

## エドワード・ソジャとポストモダンの転回<sup>1)</sup>

加藤 政 洋

### 要 旨

1990年代後半に人文諸科学で幅広く認められるところとなった「空間論的転回」の起源を慎重に見定め、その系譜を鮮やかに描き出してみせたのは米国の地理学者エドワード・ソジャの主著『ポストモダン地理学』(1989年)であった。ソジャはルフェーブルとフーコーの空間論に関する独自の解釈にもとづいて社会的に生産される「空間性」の概念を練成した一方、ロサンゼルスを中心とするフィールドに都市の歴史地誌、現代都市の再編、軍事施設の規則的な配置や大都市外縁部に形成される新しい中心などを事例として、斬新な都市論を展開している。本稿では、日本における空間論受容の動向を瞥見した上で、その源泉のひとつとなったソジャの議論の特質を『ポストモダン地理学』を中心に検討するものである。なお、ロサンゼルスに関するソジャ自身の都市論を考える上では、いわゆる「ロサンゼルス学派」の存在が重要であり、この学派についても概略を述べた。そして最後に、ソジャの都市誌の独自性を彼の視座から明らかにする。

キーワード：エドワード・ソジャ、ポストモダン地理学、空間論的転回、ロサンゼルス、都市誌

### 1 はじめに

#### (1) 「新しい地理学」とひとつのアイロニー

都市研究とそれに隣接する諸分野の1990年代を振り返ってみると、ここ日本においては主として英語圏の複数の領野を起点とするいわゆる「空間論的転回 spatial turn」の波が大きくなうねりとなっていたことが認められる。この点をいち早くレビューしたのは、上野俊哉の論考「空間の政治学——文化研究における空間の諸概念について——」であった<sup>2)</sup>。そのなかで上野は、人文地理学、文化研究、文化人類学、建築思想などにおいて興隆しつつある空間論を手際よく整序し、「空間化された表象」が作動する局面を的確に指摘していたのである。

事後的に見ると、英語圏の人文地理学で盛んに議論されていた空間論の傾向を「新しい地理学」として捉える流れを決定づけたという点で、上野の論文の意味はきわめて大きかったと言える。加えて上野は、この論文が掲載された1994年創刊の『10+1』誌にその創刊号から「都市論の系譜」と題するスリリングな論考を連載しており、都市研究における新しい可能性を開示していた。当時、人文地理学を専攻する学部生であったわたしは、デイヴィッド・ハーヴェイやエドワード・ソジャの名くらは知りこそすれ(どちらも地理学者である)、その同じ土俵で、「空間の生産」論のアンリ・ルフェーブル、「空間の実践」論のミシェル・ド・セルトー、「パサージュ」論のヴァルター・ベンヤミン、心理地理

学の観点から都市地理学を批判したドゥボールらシチュアシオニストなど、言わば「都市論のオルタナティブ」に属する論者たちの都市／空間思想を切り結んでゆく行論をまったく理解することができなかったが、「空間の政治学」と「都市論の系譜」が同世代の学部生や院生（少なくとも、わたし）を都市地理学のオルタナティブとでもいうべき領野に導くきっかけになったことだけは間違いない。

さらに、90年代半ば以降の空間論ないし「新しい地理学」の動向を考える上で注目されるのは、『10+1』を中心にその他の商業誌において組まれた特集であった。なかでも、同誌の特集「新しい地理学」（1997年）では、この号の編集協力者である多木浩二・吉見俊哉と地理学者の水内俊雄・大城直樹の座談会が設定され<sup>3)</sup>、ハーヴェイやドリーン・マッシーの論文を掲載するなど、象徴的かつ後々まで影響力を持つ出来事となった。しかしながら、「空間論的転回」を象徴する出来事という位置づけ以上に、ある事実が浮かび上がったことも興味ぶかい。

特集「新しい地理学」の編集に協力すると同時に座談会にも出席した都市社会学・メディア研究の吉見俊哉は、「地理学はこの90年代の人文社会的な知の展開のなかで、新たな脱領域的な知にとって最も重要な戦略的トポス」であると主張し、「70年代までの地理学の状況と80年代後半から90年代に展開していった新しい地理学のあいだには、かなり大きな転換があった」という「率直な印象」を語っている。つまり、吉見にとっての「『新しい地理学』のイメージは、ソジャやハーヴェイ、マッシーなどの最近の議論にある空間思想」なのであった。同じく編集協力者の多木は、「新しい地理学」を「ものすごく多層な問題をひとつに集約する言葉」と位置づけている。それに対して地理学を代表する形となった水内は「新しい地理学は1950年代にはじまったという前提」を強調し、吉見の「80年代末に出てきた空間のグローバル／ローカルな変容をめぐる言説が、日本の地理学の世界でどのように受けとめられたのか」、あるいは「それら〔ハーヴェイ／ソジャ／マッシーらの空間思想〕は日本の地理学者たちのなかではどう評価されているのか」という問いにも、学知の積み

上げを確認するにとどまっている。

無理に先走らない水内の慎重な態度の背景には、おそらく彼自身の空間論に対する批判的な認識と自ら主導する実践の積み重ねとがあったように思う。90年代の地理学は、新しい空間論と決して無縁ではなかった。類を見ない精緻な空間論を展開した水岡不二雄『経済地理学』（青木書店、1992年）の出版、『地理』誌における「社会地理学とその周辺」の特集（第38巻第5号）と連載（1993～1994年）、翻訳論文集『社会－空間研究の地平——人文地理学のネオ古典を読む——』<sup>4)</sup>の出版、若手の地理学者が「地理学的想像力の探求」を共通のテーマにして論文を寄せた大城直樹・荒山正彦編『空間から場所へ』（古今書院、1998年）の出版など、いくつもの実りある成果が生み出されていたのである。しかしながら、『社会－空間研究の地平』のまえがきとして記された「翻訳にあたって」において訳者代表の水内は、浜谷正人（富山大）が「すぐれた地理学論文の翻訳」を研究グループに呼びかけたこと（1991年5月）、1992年3月の研究集会（於：箱根）で「70年代後半から80年代初頭の空間研究の理論指向モノを早急に翻訳」する必要性を確認したことに触れながら、本論集では「社会－空間研究の社会 the social の議論ばかり目につき、具体的物的実在がなかなか出てこない…ことに、大きな不満」がもたれる（可能性がある）という懸念を表明している。都市社会学者の熱い視線、それを何とかいなそうとする地理学者の慎重な構え。

『10+1』は翌1998年に田中純の編集協力のもとで特集「メディア都市の地政学」を組み、田中と岩崎稔の対談を設定した<sup>5)</sup>。その対談のなかで、田中は「…地政学が非常に気になるのは何故かと考えたときに、地理学においてもまた『新しい地理学』が唱えられていて、空間ないしは地理学的な空間表象が権力分析の装置として非常に有効に機能している」ことを指摘したのに対し、（すでにソジャの『ポストモダン地理学』を読みこなしていたと思われる）岩崎は、次のように応じている。

…転じて、日本の地理学ということを考えますと、地政学的な問いが曖昧というか、関心をも

たれていないという印象があるんです。『10+1』の11号で特集した「新しい地理学」をめぐる座談会で水内俊雄さんや大城直樹さんが地理学の側から興味ぶかい発言をなさっています。でも、はたから地理学を見ていると、彼らはまだずっと例外的な存在なのではないか。むしろ主流というか、支配的な了解としては経済地理学的な枠組みであって…。地理的知の反省的な再解釈にしても、空間論そのものの再帰的な反省をさまざまな分野の共同の課題として取り上げていく連帯の道筋がつけられるのではないのでしょうか。〔傍点は引用者〕

吉見と水内が齟齬をきたす背景には、おそらくここで岩崎が前提する図式とはべつの文脈があるようにも思われるのだが、この岩崎の指摘を過激に敷衍したのは再び上野俊哉であった<sup>6)</sup>。

『現代思想』誌の特集「変容する空間」(1999年)で、上野は自身の「空間の政治学」に触れながら、ある意味でそれ以降に積もったであろう憤懣を直截に語っている。長くなるが、傾聴すべき指摘を含んでいると思われるので、以下に引用してみたい。

…もう何年もソジャやハーヴェイの以降の地理学や社会理論が多方面に影響を与えてきており、マッピングやカルトグラフィーという言葉が単なるメタファーではないということが文化研究の現場で明らかになりはじめている時期に、地図と想像力と空間について云々する社会学者の著作に一連の英語圏におけるマップやジオグラフィーをめぐる理論的著作群について何の参照もなく、ハーヴェイやソジャを読みこなしているはずの地理学者がディシプリンの枠組みをこえて自らの関心と最近の世界的な理論的動向についてわかりやすいかたちで門外漢に説明してくれたこともなかったことは、それじたい不可思議なことであった。「これは半分はおまえらがやるべき仕事なんだぜ」という感覚がそのときはぬぐえなかった。

…少なくともこの「日本社会」において地理学者が真面目に地理学者であるかぎり、また社会学者がまともに社会学者であるかぎり、英語圏におけるような「空間論的思考」の領域に足

を突っ込むことはかなり困難であろうということである。少なくとも、過去に翻訳されたハーヴェイの著作の日本語や、その解説、ハーヴェイを援用したもっと年配の地理学者たちの議論は、ほとんど呪術的な文体と前時代的な弁証法ジャーゴンにみちた悪しき代物であり、そのような「業界」の雰囲気をかんがみれば、地理学者や社会学者が数年前に見せた英語圏における「空間論」への沈黙と不理解と躊躇に、間違っても共感などしないものの、客観的にはこれを理解しうる。

わたしが思うに、岩崎が指摘するような「経済地理学的な枠組み」とそれ以外のわずかな例外という二項対立が絶対的な図式ではないし、上野の指摘する(岩崎の「経済地理学的な枠組み」を指すと思われる)「『業界』の雰囲気」が支配的であるわけでもないだろう(日本の人文地理学もまた、言説上のヘテロトピアなのである)。しかしながら、両者(あるいは、少なくとも後者)の指摘が、まったく的外れでないことも確かである。

上野の論考が掲載された「変容する空間」(ならびにその他の動向)を受けて、『人文地理』誌上で松本博之は1999年の「学界」(特に「学史・方法論」)に関して、次のような展望をした<sup>7)</sup>。すなわち、「今年度は、近年の傾向を反映して、地理学と人文・社会諸科学との共通の土俵をめぐる議論が1つのエポックを作った年である。そのことはまず、『現代思想』(27-13)誌上における『変容する空間』の特集号と納富信留・溝口孝司編『空間へのパースペクティブ』(九州大学出版会)の2つの著作物にあらわれている」と。そして、松本は「…わが国においても『空間論的転回』が諸分野において1つのうねりと成りつつあることがうかがえる」と結論した。さらに、90年代の空間文化論を牽引したハーヴェイの著作 *The Condition of Postmodernity* (1989) が翻訳されたことを踏まえて、松本は次のような感想を記した。

1980年代以降〔原文ママ〕…地理学と人文・社会諸科学の共通の土俵を生み出す大きな契機を与えたハーヴェイの著作『ポストモダニティの

条件』(青木書店)が社会学者吉原直樹氏の手により翻訳上梓された。…フレキシブルな資本蓄積についての政治経済的な視点とポストモダニズムについての文化論的分析との間の二元論に陥らない展開過程の記述は、巧みな翻訳の効果もあって、一編の小説を読んでいる感さえある。  
〔傍点は引用者〕

上野の諦観ともとれなくはない(けれども挑発的な)語りが残響するなかで、わたしも同感する松本の指摘は1990年代の(日本の)「新しい地理学」のアイロニカルな側面を浮き彫りにしたのだった。

(2) エドワード・ソジャの業績とその影響

「僕にとっての『新しい地理学』のイメージは、ソジャやハーヴェイ、マッシーなどの最近の議論にある空間思想なんです」という吉見の熱い語りに示されるように、「空間論的転回」の震源は、人文地理学の特定のサブディシプリンないし特定の論者であったことは間違いない。岩崎や上野の指摘は、結果としてハーヴェイというビッグネームの存在とその邦訳を通じた影響力(ならびに邦訳への反発)をあらわにするが、震源のひとつであるはずのエドワード・ソジャ

の都市/空間論、なかんずく『ポストモダン地理学 *Postmodern Geographies: The Reassertion of Space in Critical Social Theory*』におけるそれが明確化されることは、不思議なことにほとんどなかった。

とはいえ、管見のかぎりでソジャの『ポストモダン地理学』の影響を追跡してみると、思いのほか広範に及んでいることがわかる(図1)。だが、中島の論文を例外として、いずれも「空間論的転回」の範例として取り上げられるばかりで、ソジャの行論に寄り添う議論はあまり見られなかった。そして十分な議論もないまま、1996年には『第三空間 *Thirdspace*』が、2000年には『ポストメトロポリス *Postmetropolis*』が出版されるにいたったのである。このような状況のなかで、『ポストモダン地理学』がようやく翻訳出版されたのは2003年のことであった<sup>8)</sup>。

もともとアフリカの経済発展に関する研究に取り組んでいたソジャは、1960年代末から1970年代前半にかけてその成果を多くの論文で発表すると同時に著書としても出版しているが、70年代後半になると論文の発表数は減じ、著作の刊行もなくなっている。それまでの旺盛な学究からすれば奇妙な沈黙に思えるこの時期、実のところソジャは、アンリ・ルフェーブらの著

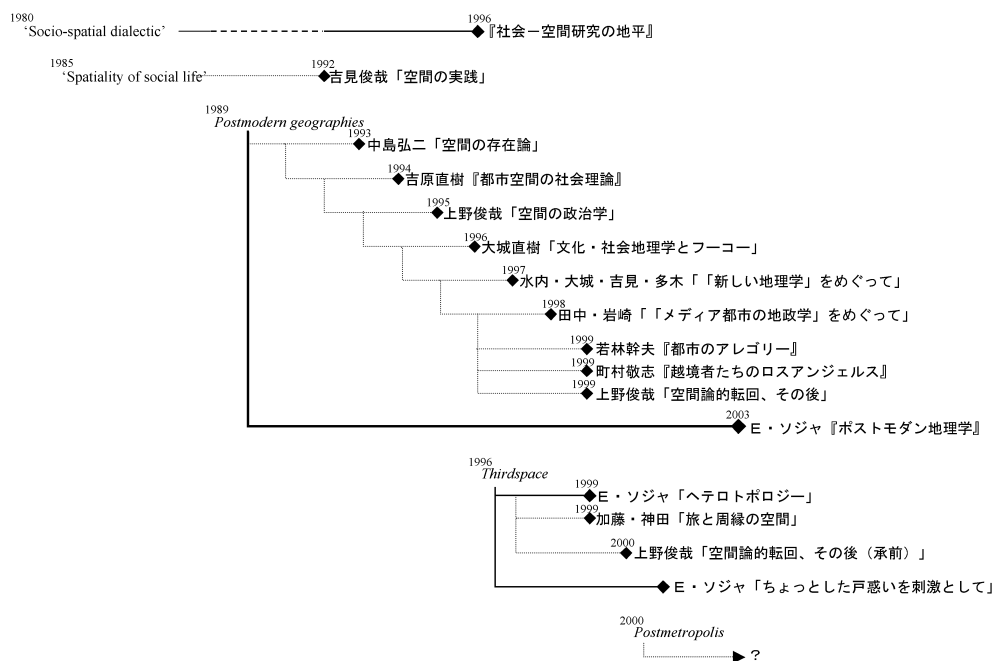


図1 ソジャの主要な論文・著作と日本での受容

作を丹念に読み直すことを通じて、独自の空間論を練成していた<sup>9)</sup>。そして1980年に発表された「社会—空間弁証法」<sup>10)</sup>を皮切りに、それまで省みられてこなかったマルクス主義における空間（論）を起点にして「空間性」（社会空間）にまつわる議論を展開する一方、ロサンゼルスフィールドとした斬新な都市論（および都市誌）を発表しつづけている。

前置きが長くなってしまったが本稿の目的は、90年代の空間論の興隆が「新しい地理学」の登場として、あるいはひとつの「転回」として受け止められたなかで、必ずしもその焦点となることのなかったソジャの議論を『ポストモダン地理学』を中心に検討し、その特質を整理することにある。以下では、まず邦訳された『ポストモダン地理学』の内容を（Ⅱ）、次いで彼のロサンゼルス研究の背景のひとつである通称「ロサンゼルス学派」の形成を瞥見した上で（Ⅲ）、その都市誌にも焦点を合わせることにしたい（Ⅳ）。

## Ⅱ 『ポストモダン地理学』の構成

### (1) 『ポストモダン地理学』の位置づけ

1980年代の作品を中心にまとめられた本書は、批判的な社会理論における空間の位置づけ、社会—空間弁証法、空間の存在論、アンソニー・ギデンズの空間論などを理論的に探究する前半部、都市・地域の政治経済学的アプローチに関する理論的整理（第4章・第7章）、そして「20世紀後期の首都」ロサンゼルス<sup>11)</sup>の経験的研究（第8章・第9章）から構成されている。

本書が世界中に多くの読者を得たことは、これまでに版を7回重ねいくつもの言語に翻訳されたことからもうかがい知ることができるし、人文地理学のみならず、社会学・建築学・美学などでテキストのひとつに指定されるなど、人文・社会諸科学に多大な影響を及ぼしたことは論をまたない。

そのなかでも特筆すべきは、現在では当然のごとく認識されることとなった「空間論的転回」を決定づけたこと、言わば本書がその中心軸となった点であると思われる。もちろん、ソジャ

が本書のなかで鮮やかに描き出したように、（ポストモダンの）空間論的転回の起源が影響力のある社会批評家たちが空間論へと転じた1960年代にあり、その思潮が1980年代になって「社会理論のみならず、美術、建築、文学、映画、大衆文化、現代政治」において空間にまつわる批判的な言説として開花したことは承知しているが、その後十年間、つまり1990年代の空間論やフェミニスト地理学の興隆、都市研究における文化論的転回を振り返ってみるにつけ、本書が批判地理学の流れを決定づける画期的な役割を果たしたことを改めて感じるのである。

加えて、1996年に出版された『第三空間』、そして当初は『第三空間』の姉妹書として企図され2000年に出版された『ポストメトロポリス』に対して、ソジャは事後的に『ポストモダン地理学』をその第一巻と位置づけ、これら三冊を三部作と呼んでいることを踏まえれば、まさしくソジャ自身の研究履歴においても旋回軸になったと言えるだろう。

### (2) ポストモダン postmodern / 地理学 geographies

*Postmodern Geographies* の邦題は『ポストモダン地理学』である。だが、原題が複数形の「地理学 geographies」であることの意味合いを十分に踏まえておかななくてはならない。ソジャが冒頭に列挙した「ポストモダン地理学（の開拓）者たち」——ルフェーブル、フーコー、バージャー、マンデル、ジェイムソン、バーマン、プーランザス、ギデンズ、ハーヴェイ——の名が如実に物語っているように（人文地理学に「本籍」をおく者はハーヴェイだけである）、そもそも「ポストモダン地理学」は専門分化した学科としての地理学を意味するものではない。そうではなく、1980年代に斯学を含むさまざまなディシプリンで起こった「批判的な空間的視角の再主張」に見られる、（ディシプリンという枠組みを揺るがすような）空間論とその起源の横断性や多発性を、ソジャは複数形の「地理学」によって言い表わそうとしたのである。このことは、「ポストモダン地理学の起源」をその開拓者たちの言説に求め、慎重かつ執拗に「西欧マルクス主義の空間論的転回」、

「マルクス主義地理学のポストモダン化」を見定めようとする行論からも明らかであろう。ルフェーブルやフーコーに啓発された複数の「ポストモダン地理学」が1980年代に大きなうねりとなって「空間の再主張」を可能にしたのだ。この点で、たとえば「ポスト歴史主義の空間化」というような形で多用されているspatializationは、前述の上野にしたがって「空間化された表象」が作動している状態を指しているものと考える必要がある。

また、原書の副題に「批判的社会理論における空間の再主張」とあるのは、批判的な社会理論の歴史において、かつて空間の重要性が主張された時代があったことを含意している。本書の目的のひとつは、資本主義の歴史地理と相互作用する批判的な社会理論の系譜をたどり、そのなかに占める「空間」の位置どりを見定めることにあった。ソジャは、この課題に答えて、時に一方向的な《西欧マルクス主義》と《近代地理学》の関わり方を軸に、空間を潜没させた歴史主義と後に起こる空間の「再主張」を丁寧に跡づけてゆく。

その行論では、1830年代から現在にいたるまでの資本主義の「近代化」過程を時代区分する四つの局面が参照枠として設定された。ここでいう「近代化」とは、「具体的な形態をもった空間-時間-存在という重要な再構成物を生産するために周期的に加速される社会再編の連続的な過程」である。

四つの局面は、概ね以下のようにまとめることができるだろう。

- ① 第一の近代化：1848年から1851年の「革命の時代」(ホブズボウム)を折り返し点とする19世紀中葉の競争的な産業資本主義の古典時代。
- ② 第二の近代化：世紀末を折り返し点とする(1880年頃から第一次世界大戦まで、あるいはパリ・コミュン敗北の余波からロシア革命にいたる)、企業の独占による内包的強化と帝国主義的な外延的拡大の時代。
- ③ 第三の近代化：ロシア革命から1960年代末にいたるフォーディズム、ないしは官僚主義的な国家管理の時代。
- ④ 第四の近代化：1960年代末にはじまるポス

トフォーディズム、ないしはポストモダンの時代。

この一連の「近代化」に対する、文化的、イデオロギー的、再帰的、理論形成的な応答を、ソジャは「モダニズム」と定義する。すなわち、「同時代のコンテクストが大きく変化したことを前提に、今、何をすべきかという挑戦的な問いに直面した際に動員される、状況に応じた社会運動」であるのだ、と。

モダニズムが「反応の形式」であるという認識は、「近代化」の各局面が新しいモダニズムの母胎となること、そして資本主義的モダニティの変化に応じて社会理論もまた再構成されるということを含意している。つまり、近代化の四つの局面に対応して批判的社会理論もまたその様態を変化させてきたのである。ソジャの卓抜した歴史認識にもとづく観察を概略すれば、以下になるだろうか。

- ① (本書では詳述されていない) 歴史性と空間性がバランスよく解放意識の源泉となっていた理論的ユートピアの時代。
- ② パリ・コミュン陥落後、空間的批判が後退し、歴史主義が台頭した時代。
- ③ その後1960年代までつづく、社会理論において空間が従属的な位置に潜没させられた理論的偏向の時代——繰り返せば、「それはベルクソンとともに始まったのか、あるいはその前にはじめていたのか? 空間とは死んだもの、硬直したもの、非-弁証法的なもの、じっと動かないものだったのです。その代わりに時間が豊かなもの、肥沃なもの、生き生きとしたもの、弁証法的なものでした」とフーコーが指摘した時代。
- ④ 「帰結をわたしたちから覆い隠しているのは時間ではなく空間なのである」というパージャーの言葉に象徴される、空間の再主張の時代。

この議論で想定されているのは、資本主義に影響を及ぼすシステムの危機によって引き起こされる「近代化」と、変わりゆく物質的な条件を理解し新たに方向づけようとする「モダニズム」とのあいだで進展する弁証法である。ここでソジャは、ジェイムソンが用いた「ポストモダニズム」を時代区分の概念として戦略的に導

入することで、空間の再主張、ポストモダン地理学の生成、そして空間論的転回が、第四の近代化（奥深く幅広い現代生活の再編）に対する、ある種の必然的、ないし必要不可欠な「反応の形式」であることを明確にした。ポストモダン地理学の課題は、資本主義の第四の近代化、すなわち、わたしたちが目当たりしている最近の歴史地理のなかに、その変遷を生み出す動因を認識し、説得力のある解釈を示すことである。

また、『ポストモダン地理学』で十分に展開されなかった主要な論点は、『第三空間』において敷衍されその位置づけも明確にされている。たとえば、第1・2章で論じられた1980年代の「空間の再主張」、そして1990年代の空間論の隆盛は、以下のように「空間論的転回」として明確化された。

人文・社会諸科学における現在の批判的研究は、先例のない空間論的転回を経験していると言える。おそらく後から、もっとも重要な知の発展であったと見なされるであろうこの転回のなかで、一方で時間と歴史（人間生活の歴史性）に、他方で社会諸関係と社会（人間生活の社会性）に対して伝統的に付与されてきたのと同じ批判的洞察と解釈学的力をもって、研究者たちは空間と人間生活の空間性を解釈しはじめたのである。<sup>11)</sup>

ソジャもまた、この空間論的転回のただなかで、自ら再発見したルフェーブルとフーコーの空間論をよりいっそう念入りにたどり直した。人間生活の空間性を解釈するにあたって参照されたのは、『ポストモダン地理学』の第1章でその可能性が示唆されていた二つの空間性、すなわちルフェーブルの「生きられる空間」とフーコーの「ヘテロトピア」である。

空間は、透明／不透明という二重の幻想によって、二者択一的に精神的な構築物ないし物的な形態のどちらかとみなされるのがつねであった。具体的であると同時に抽象的な「生きられる空間」／「ヘテロトピア」、この二つの社会的に創出される空間性からソジャが引き出したのは、客観性－主観性、物質的－精神的、現

実－想像といった二項対立的論理を破棄する糸口、すなわち『第三空間』で主題的に論じられる批判的な「他者化としての三項化」である。

さらに、この「第三空間」の探究を通じて「地理学的想像力 the geographical imagination」の射程を劇的に広げたのが「批判的なカルチュラル・スタディーズ」であったことをソジャは認め（『ポストモダン地理学』の第7章でも示唆されている）、『ポストモダン地理学』の第4章・第7章・第8章で議論された都市・地域の政治経済学に対して、「新しい文化政治（学）New Cultural Politics」を要請するにいたったことも注目しておいてよい<sup>12)</sup>。

### (3) ロサンゼルス研究

また、カリフォルニア大学ロサンゼルス校大学院公共政策・社会調査研究科都市計画学科で教鞭をとるソジャは、三部作にはいずれもロサンゼルスをフィールドとした経験的研究を収録している。『ポストモダン地理学』では対となる「すべてがロサンゼルスに集まる」という歴史地理学的な第8章と「ロサンゼルスを分解する」という現在の都市景観を手際よく点描してゆく実験的な都市誌の第9章、「ロサンゼルスならびにその他の現実－かつ－想像される場所への旅」という副題を持つ『第三空間』では、第一部が「第三空間」の探究に充てられ、第二部には「ロサンゼルスの内と外」と題して、要塞都市や外縁都市に関する論考ならびにアムステルダムとの比較都市論を収録した。さらに三部構成からなる『ポストメトロポリス』では、第三部をまるまるロサンゼルス論に充てた他、随所にこれまでの成果を踏まえた論考を取り入れている。

次章では、そうした彼のロサンゼルス研究の社会的な環境とでもいうべき、ある集団の存在に触れておくことにしたい。

## III ロサンゼルス学派の都市論

### (1) 移動する都市論？

アメリカのノーベル文学賞作家スタインベックが、かつて「移住幹線道路」と呼んだ Route 66

は、1926年の完成以来70年以上の歳月を経て、今やモニュメンタルな存在になろうとしている。だが、この道路を移動したのは、土地を離れてカリフォルニアへと向かう農民たちばかりではなかった。Route 66には、もうひとつの貌があったらしい。それは、言わば、移動する理論の軌道とでもいうべき、この道路が果たした役割に拠っている。このような印象を決定づけたのは、「Route 66」という標識がぼんやりと浮かんだ一枚の道路の写真を表紙に掲げる『シカゴからLAへ』と題された論集であった<sup>13)</sup>。

一見、その表紙とタイトルは、1920年代のシカゴから(1980年代以降の)ロサンゼルスへと都市論の生成する場が移行したことを物語っているように思われる。だが、編者であるマイケル・ディアのねらいは単にそれを示すことだけにあるのではなかった。彼はシカゴ学派に対抗するロサンゼルス学派(以下、LA学派)の形成とその意義を高らかに謳い上げているのである。都市社会学者の町村敬志が、やはりシカゴ学派との対照で、「批判的都市研究者たち」のゆるやかなサークルが1990年代にLA学派と呼ばれるようになったことを指摘し<sup>14)</sup>、また邦訳された『要塞都市LA』でマイク・デイヴィスが彼らの主たる研究テーマを紹介している<sup>15)</sup>、すでにその存在はひろく知られているかもしれない。デイヴィスは、著作の出版(原著は1990年)に先立って発表した論文で、南カリフォルニアに関する「真摯な調査と批判理論の総体」が1980年代後半に登場してきたことを踏まえて、ロサンゼルス研究に関与していた「マルクス主義地理学者たち」を中心とする(自らを含む)研究者集団が当時すでに「LA学派」と自称していたことを、構成員の実名を挙げて認めている<sup>16)</sup>。

この学派の(明確な)出発点は、あるいは『社会と空間 *Society and Space*』誌で1986年に組まれたロサンゼルスの特集号に求めることができるかもしれない。この号に「ロサンゼルス——20世紀後期の首都——」と題するエディトリアルを寄せたのは、他ならぬソジャと同僚のアラン・スコットであったし、ディアもまたいち早くロサンゼルスのポストモダニズム論を展開していたからである。この特集号以降の草創期

LA学派が貢献した研究領野をデイヴィスにならって整理すれば、以下になるだろう。

① 社会—空間弁証法を糸口にして都市の政治経済と空間を長期的／全域的に展望するソジャの『ポストモダン地理学』に代表される研究、② フレキシブルな蓄積体制の登場を踏まえて南カリフォルニアの脱／再産業化を論じるスコットの『メトロポリス』<sup>17)</sup>に代表される研究、③ 都市生活の質に直結する政策を批判的に検討するゴットリーブとフィッツシモンズの研究<sup>18)</sup>、④ インナーシティの労働市場との関連で都市下層やホームレスの問題を論じたディアとウォルチの共同研究<sup>19)</sup>、そして⑤ 土地の開発と所有をめぐるディストピア的に都市社会史を描くデイヴィス自身の研究。

LA学派の都市論は、主としてカリフォルニア大学ロサンゼルス校と南カリフォルニア大学に籍を置くさまざまな論者の、それぞれ異なるアプローチにもとづくロサンゼルス研究の総体ということができ、ソジャ、スコット、デイヴィスらに多くの単著がある一方、「学派」としての成果は、1925年に出版されたロバート・パークらの『都市 *The City*』を思わせるスコットとソジャの編集した『都市 *The City*』<sup>20)</sup>に結実したと言ってよい。とはいえ、編者であるスコットとソジャが認めるように、対象や記述のスタイル(時には結論にさえ)大きな違いが見られるものの、資本主義の「近代化」の局面——なかならず、1960年代後半にはじまるポストフォーディズム、ポストモダンの時代——に焦点を合わせているという点で、明示的ではないにせよ固有の枠組みは存在しているように思われる。

繰り返すならば、「近代化」とは「具体的な形態をもった空間—時間—存在という重要な再構成物を生産するために周期的に加速される社会再編の連続的な過程」であり、その一連の「近代化」には、文化的・イデオロギー的・理論形成的な応答がある、つまり、資本主義的モダニティの再編に応じて社会理論もまた再構成される、と考えるのがソジャの立場であった。このソジャの議論にしたがうならば、「同時代のコンテクストが大きく変化したことを前提に、何をすべきかという挑戦的な問いに直面した際に動員される、状況に応じた社会運動」の一種



として LA 学派の都市研究を位置づけることができるかもしれない。デイヴィスが、LA 学派の都市研究を「対抗的知識人」の「勇敢な動き」と見なしていることもその傍証となろう。近代化が「再編」という形をとって顕在化するロサンゼルスは、都市の見方、都市空間形成の根本的な意味の解釈に深く影響を及ぼしているのである。

さらに再びソジャにならって言えば、『都市』における LA 学派の課題は、彼らが目の当たりにした1960年代後半以降のロサンゼルスの歴史地理のなかに、その変遷を生み出す動因を認識し、説得力のある解釈を示すことにあったと言えるだろう。一見まとまりのなさそうに見える LA 学派ではあるが、彼らには、住宅地区から、グローバル市場、あるいは蓄積体制にいたるまでのあらゆるレベルで生じている「再編 restructuring」をロサンゼルスで研究しているのだという共通の認識があった、というデイヴィスの指摘はその証左となる。LA 学派の再編に関する実証的研究の有効性については、長尾謙吉が詳細に検討しているので<sup>21)</sup>、ここではその都市論の特質についてのみ整理しておくことにしたい。

## (2) ロサンゼルス (学派) の特殊性

長尾も指摘するように、LA 学派の都市論は、「ロサンゼルスの特殊性を抜きにして」語ることはできない。「特殊」とするからには比較の対象が想定されているわけであるが、後述するようにそれはシカゴに範をとった都市像や都市観である。LA 学派の「主導者 conductor」と目されるディア、そしてソジャとスコット、さらに LA 学派批判の急先鋒であるフィリップ・エシントンらへのインタビューから構成された「新しい都市研究」<sup>22)</sup>は、「ロサンゼルスの特殊性」(ひいては、LA 学派の特殊性)を浮き彫りにする。

それによると、一貫して彼らは「ロサンゼルスが都市に関する多くの前提に異議をつきつける事例である」ことを主張している。たとえば、産業構造の転換を一義的に前提する「脱工業化社会」という考え方は、まったく間違っているのだと。ストゥーパーやスコットらの成果が示

すように、アメリカ都市においては、たしかに「脱産業化」(なかでも、大規模かつ垂直に統合された、組立ラインからなる大量生産工場の斜陽)がつづいている一方、ロサンゼルスでは膨大なアンドキュメンティッドの労働者に依存した搾取工場を基盤とする製造業、ならびにハイテク産業とが同時に興隆<sup>23)</sup>、つまり「再産業化」している。それは、言わば「資本主義の新しいモデル (=フレキシブルな資本主義)」(スコット)であって、伝統的な産業発展のモデルで捉えきれぬものではない<sup>24)</sup>。結果として、労働市場の中間層は空洞化し、逆に所得規模の最高部と最低部の双方が極端に膨脹するという「漏刻型経済 hourglass economy」が出現する。このような分業形態における二極化は、武装した守衛や高い壁で防御された郊外のコミュニティ<sup>25)</sup>、住宅の払底にともなうインナーシティの過密な居住環境、そしてダウンタウンの要塞化する建造物とその周囲にひろがる絶望の景観とに映し出される。

こうした経済と生産空間の再編によって転形し、また逆に再編を促進もする都市の空間性にいっそうの注意を払うのがディアとソジャである。二人は、スプロール化をとめないながら脱中心化する遠心的なメトロポリスの「典型」をこの都市に見て取った。むろん、前世紀の転換期以来、住民の一定階層と経済の諸部門とが都心を離れ(脱中心化)、郊外に新たな中心地が形成されつづけていること(多核化)を二人は認めているが、最近の「近代化」の局面、具体的には1970年を前後する時期にはじまる危機によって引き起こされた都市再編の根底には、ある決定的な変化があると指摘する。それは、大都市圏の縁辺に、工業団地や金融業の拠点、大規模な住宅地、そして巨大な消費・娯楽施設などが無定形に集積する再中心化の舞台が登場してきたことである。ソジャが「集中した分散化 concentrated deconcentration」とでも呼ぶべき都市のパターン化を指摘すれば、ロサンゼルスでは「もはや中心が後背地を編成することはない」とディアは主張する。

以上のような議論を受けて、ロサンゼルスには「都市性の新しい(ポストモダンの)形態」が出現しており<sup>26)</sup>、もはや都市性に関するあり

きたりの考え方はこの都市に通用しない、と結論されるのである。ここで「新しい都市研究」に「ロサンゼルス〔学派〕の研究者たちはロサンゼルスと自らの着想を用いて『シカゴ学派』の支配に終止符を打とうとしている」という長たらしい副題があることを、急いで付け加えておかなくてはならない。「ディア氏とその仲間たちは、ある社会科学の幽霊—都市学のシカゴ学派—を祓おうとしている」と指摘されるように、ディアやソジャの議論は、都市発展の空間形態を説明する「シカゴ学派」の定型化された図式、すなわち、バージェスの同心円モデルを念頭において立論されている。

繰り返しになるが、LA 学派によって対象化されたのは、自己完結的な社会としての都市ではなく、地理的に不均等な発展の新しい局面と場所の種別性の双方を反映しながら加速化する都市の再編である。再編は、それぞれの都市地域の歴史地理的なコンテクストに応じて固有の強度と形態をとるだろう。論者によって分析の水準に大きな隔たりがあるとはいえ、LA 学派のロサンゼルス論の根底には、グローバル化が、これまで時間をかけて確立されてきた国際分業のみならず、都市地域内の空間的分業をも再編する地理的動因になっている、という認識がある。

また、さらに一步踏み込んで、世界中で起こっている都市的傾向——なかんずく、グローバル化の多種多様な過程——が、いち早く、しかも顕著に発現する都市地域、言い方を換えれば、グローバル資本主義の影響力に対して最初に警鐘をならした都市こそロサンゼルスなのだ、という論調も LA 学派の特徴であった。「わたしたちは、いずれ他の都市がロサンゼルスに見られるような変化や再編を経験するだろうと予測しています」というソジャの発言に象徴されるように、都市性の未来をロサンゼルスに見て取る論調——例外ではなく、原型であるという主張——が主流となっているのだ。

英語圏の地理学では LA 学派の活躍をそれなりに目の当たりにしていたためか「新しい都市研究」に対する反応はほとんど見られなかったが、そうした「典型」や「原型」であるとする彼らの認識には、多くの社会学者から異論・反

論が寄せられた。「あらゆるものがロサンゼルスに集まる」(ソジャ) とはいえ、『都市』でソジャが論ずる再編の過程ならびにその帰結として同定される都市形態は、わずか6つに過ぎない——都市形態の再編(外心都市 exopolis)、生産の地理の変容、グローバル化(世界都市の形成)、大都市の再分極化、要塞都市化、都市イメージの再編。月並みではあるが、「最大の」「最初の」と形容する前に、比較研究による検証が必要であろう。さもなくば、エシントンが苦言を呈するように、それらは単なる「やかましい書物 noisy books」に過ぎなくなる<sup>27)</sup>。

いずれにせよ、ロサンゼルス研究の興隆、あるいは LA 学派の形成は、その一面において、都市研究におけるシカゴ学派のモデルやヘゲモニーに対する反動、あるいは異議申し立てであったということは間違いないし、1920年代のシカゴと1980年代のロサンゼルスに空間的形態もしくは都市過程に決定的な違いがあることも確かだろう。二つの学派の名称がそれぞれの都市(大学)名にちなんでいるだけに、とかくこのような都市形態の違いにばかり目を向けてしまうのだが、そのことに気を取られすぎると「学派」の本質的な違いを見落とすことになる。この点については後述するが、1980年代以降の LA 学派に代表される都市論の動向を、単にシカゴからロサンゼルスへというパラダイムの空間的なシフトと見なすのでは、おそらく十分でない。

### (3) 都市の記述をめぐって

もうひとつ、LA 学派の都市論の特質として注目しておきたいのは、都市を認識する際の彼らの構えである。たとえば、「新しい都市研究」における次のような挿話は、どのように受け取ったらよいだろうか。すなわち、

この都市のありように頭を悩ますロサンゼルス〔学派〕の研究者たちは、無数にある眺望のきく地点 vantage points [から都合のいい地点] を選ぶことができる。マイケル・ディアが好むのは、[都心から] 75 マイル離れたところ、あるいは 2000 フィートの上空だ。…ディア氏は、この地域の空間的布置 spatial arrangement は

社会的布置を少なからず示している、と信じている。そこで彼は定期的に、この都市の縁辺にある砂漠へと車で出かけたり、レンタルしたヘリコプターからつねに変わりつづける都市のトポグラフィを地図化しているのだ。

というエピソードである。おそらくここにあるのは、「巨大都市やグローバルな都市では、かつて行なわれた『遊歩』や『漂流』がもはや意味をもたない」<sup>28)</sup>という認識だろう。あるいは、都市認識の方法を概観したエシントンらにならって言えば、知を意味する二つのスペイン語 *Saber* (知識として知っている) と *Conocer* (経験として知っている) のうち、前者を選好する態度である<sup>29)</sup>。'walking the city' としての *Conocer* ではなく、'surveying the city' と措定される *Saber* をもとに得られた教訓、それが「都市性に関するありきたりの考え方」——特に都市形態の同心円モデル——はロサンゼルスにはもはや通用しない、というものであった。しかしながら、このような視点をもたらしたのは、なにもディアばかりというわけではない。

'surveying the city' としての *Saber* を都市記述の戦略として積極的に組み込んだのは他ならぬソジャその人であった。

#### IV ソジャの都市誌

##### (1) 上／中／下からの眺め

すでに述べたとおり、UCLA で教鞭をとるソジャは「ロサンゼルス学派」を代表する論客の一人であり、三部作にはいずれもロサンゼルスフィールドとした経験的研究が収録されている。反響を呼んだ『ポストモダン地理学』のなかで、とりわけ議論が集中したのは、空間論的転回や透徹した空間の存在論ではなく、第9章の「ロサンゼルスを分解する」で示された斬新なロサンゼルス論をめぐってであった。

ジェイムソンとルフェーブルとともに1984年におこなった「ボナヴェンチャー・ホテルを起点としてロサンゼルスを中心を螺旋状にたどる巡検」、そしてロサンゼルス半径100kmの圏内を「鳥瞰的に周遊する巡検」とにもとづき、

ソジャは「ロサンゼルス都市域の批判的な人文地理(学)を構築」(つまり紙上で「再現」)するという、独自の都市誌の方法を編み出していた。ロサンゼルスを中心部の巡検は「strolling」とも表現されているが<sup>30)</sup>、街路の経験にもとづく記述は明示されず、小型飛行機にでも乗っているかのような鳥瞰的な巡検と、高層ビルの最上階からの観察とが「神の目のようなまなざし」であるとして批判を招いたのである。とはいえ、ソジャには中心(要塞都市 LA)にばかり照準する都市論の「マンハッタン化」に一石を投じようとする意図があったことも想起しておかなければならない。

『第三空間』の第9章にも「ちょっとした戸惑いを刺激として——アムステルダムとロサンゼルスの同時代の比較——」と題する都市論が収録されている。この論文は、「スパイストラートにて On Spuistraat」と「スパイストラートを離れて Off Spuistraat」という二つの筋から構成され、前者では1990年にソジャが滞在したスパイストラート(スパイ通り)を中心にした都市の歴史地誌を論じ、後者では20世紀後期のポストフォーディズム的な都市空間形成、都市形態の地理的再構成(脱中心化／多核化)に焦点を当てる。要するに、「スパイストラートにて」では、まさしく「下からの眺め seeing from below」にもとづく都市誌を実践し、「スパイストラートを離れて」では、「ロサンゼルスを分解して」で採用した手法を再演するかのごとく、アムステルダムのセントラムを中心とする100km圏——「大アムステルダム」ないしは「ラントスタット Randstad」(大都市圏)——を設定し、アムステルダムを中心とした都市構造や都市形態を丹念に記述したのであった。

若かりし頃のソジャは「路上の地理学者」であったというが、都市の記述においてその本領を発揮したのは、『ポストモダン地理学』におけるロサンゼルス解釈学的巡検ではなく、まさしく「スパイストラートにて」のそれであった。街頭で彼自身が目の当たりにした風景を随所にちりばめ、まるでベンヤミンの「都市の肖像」を思わせるような描写がつづく。とはいえ、ソジャの移動する身体が各現場で可視的に表現されるわけではない<sup>31)</sup>。「スパイストラートにて」

で重要な役割を果たしたのは、言うまでもなく都市構造の骨格をなす街路としてのスパイストラートそれ自体と、その通りに面した彼の住まいであったのだが、その一時的な住まいの窓辺は何にもまして彼にとっては「眺望のきく有利な地点」であったという。すなわち、その眺めは「アムステルダムの活気ある中心における現代生活の感動的な光景が視覚的にひろがり、わたしの目を今までわたしが見ようとしてきたこと以外のものに向けて開かせてくれた」というのだ。

「スパイストラートにて」の白眉は、なんといってもこの「窓からの眺め」における都市景観の描写である。窓の外、その左右に広がるスパイストラートの建造環境を生きられる空間として描写するソジャのまなざしは、ハーヴェイの言葉を借りるならば、「豊かで複雑な資本主義の歴史地理における都市空間形成の役割と同様に、建造環境の形成、建築デザイン、街頭文化とマイクロ・ポリティクス、都市の経済・政治にまでおよぶさまざまな事柄」を捉える可能性を示していると言えよう（ここでソジャは、それと意識することなく、ルフェーブルの身ぶりを反復している点も面白い<sup>32)</sup>）。グローバル化のさまざまな歴史的段階を街路や建造環境のレベルから捉え返したすぐれた都市誌である。

## (2) ひとつの回答

『ポストモダン地理学』と『第三空間』の第9章は、どちらも鳥瞰的な巡検を採用しているという点で共通性がある<sup>33)</sup>。すると、『第三空間』の第9章に「上からの眺め、そして下からの眺めについて」という後記が付されたのは<sup>34)</sup>、二つの点で当然であったと言えるかもしれない。まず一点目として、別稿で詳細に論じたように<sup>35)</sup>、ポストモダンの人文地理学をめぐる論争のなかでひとつの焦点となったのは、「上からの眺め」と「下からの眺め」に代表される都市へのまなざしであったこと。つまり、ソジャはこの論考で自身への批判を踏まえて「上からの眺め」と「下からの眺め」を調停すべく介入したのである。そして二点目は、前述のとおり、「ちょっとした戸惑いを刺激として」自体が批判に応える都市誌として構成されていることである。

そもそもソジャは、この二つの見方を、都市についてより多くのことを学ぶための問いの立て方として「上からの眺め、そして下からの眺めについて」のなかで次のように整理している。すなわち、都市の状況を概念化するのは、「日常生活のマイクロ地理に没入し、都市の街路からの局所的な眺め」によってなのか、あるいは「都市を全体として観察し、より包括的に地域的スケールないしはマクロ空間スケール」で眺めることによってなのか、と。ソジャ自身の結論は、どちらも不完全であることを認めつつ、二者択一でなく、二者対等に必要である、というものであった。エシントンらもまた、空間を理論化する際に「一方には都市現実の批判的分析を、他方には日常生活の批判的分析」を含むことが重要であると説くルフェーブルに依拠して二つの知‘Saber y conocer’の必要性を主張する。

そして二者対等にと主張するソジャは、「下からの眺め」を選好する者たちの構えを批判した。すなわち、「都市的状况の全体論的読解に対する軽蔑」、そして「下からの眺め（極度に局所化された遊歩者の個々の声にもっともよく示される、日常生活の詳細な民族誌—地誌 ethnography-geography）」の選好という一方的な態度に対してである。そうした構えをとる者たちを、「[上からの眺めを]手におえない男性主義的な視覚至上主義と見なし、ローカル、身体、街路、日常といった親密なものばかり好んで焦点を当てるフェミニストの都市批評家たち」と特定し、「下からの眺め」の特権化に多大な影響を及ぼした人物として、ミシェル・ド・セルトーを名指している。周知のとおりド・セルトーは、上からの眺めを「読みやすさへの欲望」のもとに街路レベルの差異、すなわち都市生活の日常性を均質化する voyeurism であるとして、空間の実践としての歩行から都市への問いを展開した人物である。ド・セルトーの議論、そしてその影響を受けたフェミニストの議論と対峙するソジャは、その構えを批判こそすれ必ずしも「下からの眺め」そのものを唾棄しているわけではない。「上からの眺め」と「下からの眺め」を往還しながら都市を記述すること、そして都市の理論を構築しようとする意図は、スパイストラートをめぐる議論からも

十分にうかがい知ることができるし、これは『ポストメトロポリス』にも引き継がれてゆく。

とはいえ、ルフェーブル自身はといえば、「都市現実」から出発して「日常生活」を研究の対象とする場合、「生きられる経験」を削ぎ落としてしまう危険があることも指摘していた（どちらから出発しても同じ地点にたどりつく、ということはあるのだろうか）。ベンヤミンの遊歩者、シカゴ学派のフィールドワーカー、バンギの探検者、シチュアシオニストの漂流者、ド・セルトーの歩行者など、都市論の系譜に燦然と輝くさまざまな形象を想起するとき、このようなルフェーブルの思想の実践性は、「ロサンゼルスを分解する」の手法を継承しつつ街歩きにもとづくモノグラフを組み込んだ「ちょっとした戸惑いを刺激にして」において、スパイストラートの路上を歩くソジャの姿に受け継がれているように思えるのである。

## V おわりに

最後にもう一度 LA 学派に立ち返っておきたい。LA 学派形成の動因には、都市研究におけるシカゴ学派のヘゲモニーに対する反動的な側面があることについてはすでに述べた。知られるように、20世紀の初頭、急激な産業化の進展とともに、階級や階層、さらには言語や生活習慣さえも異にする膨大な数の（移民）労働者の流入によって大都市の相貌を顕わにした新興都市シカゴに対して、パークをはじめとするシカゴ学派は、人間生態学の観点から、個人や集団の相互作用（競争と淘汰）を通じて節合＝分節される空間形態をモデル化した。それは、移住者が適応すべく構造化されている自己完結的な領域である。こうした見方を「生態学的視点」と呼ぶとすれば、LA 学派のそれは、マクロな社会的文脈のなかで都市の位置を見定め、社会空間的な構造を探究する「政治経済学的視点」ということになる<sup>36)</sup>。

さらに言えば、この視点の相違は、近年の都市社会学に顕著な都市論を空間論として再構築する試み<sup>37)</sup>、あるいは「都市論から空間論へ」<sup>38)</sup>のシフトとして語られる動向と無関係ではな

い。ひろく「空間論的転回」と呼ばれるこの理論的趨勢は、『都市への権利』や『空間と政治』に代表されるルフェーブルの都市論と数年前に邦訳された『空間の生産』論を皮切りに、マニエル・カステル『都市問題』以降の都市社会学、そしてデイヴィッド・ハーヴェイ『都市と社会的不平等』以降の都市地理学で、空間を潜没させてきた社会理論における歴史主義に抗い、空間を理論構築の中心に積極的に組み込み「再主張」してきた、その横断的な潮流に裏付けられている<sup>39)</sup>、と同時に冒頭で述べたポストモダンの転回の旋回軸としての役割を果たしたとも考えられるのである。

「生態学的視点」から形象化される都市をイデオロギーであると批判したルフェーブルとカステルの議論が、どのようなかたちで LA 学派に接続しているのか慎重に見定める必要はある。だが、少なくとも、LA 学派によって展開された研究は、同心円状に構造化された都市形態をそのまま社会の現われとみなす「空間物神論」において普遍的な自然法則へと還元されていた階級諸関係を、脱自然化する営みであったと言えるだろう。階級のみならずさまざまな社会的諸関係は空間的諸関係としてどのように構造化されるのか、そして階級、ジェンダー、人種／民族を分割する線を生産し強化する機制に焦点を当てるとき、明確に問いを構成する変数として浮かび上がるのは空間であった。

議論の粗密を含め、たしかに LA 学派の研究をもって、生態学的視点から政治経済学的視点へ、あるいは都市論から空間論へのシフトとして杓子定規に割り切ることはできない。だが、ロサンゼルスを研究しているというよりは、むしろロサンゼルスで研究している、つまり「方法としてのロサンゼルス」——町村敬志の言葉を借りれば「ポストモダン都市の実験室」？——という見方をとるならば、LA 学派は、資本主義経済の再編という一般過程と、それが具体的かつローカルに発現する場との弁証法に対する問いを惹起した、言い方を換えれば、都市の空間的再編を通してグローバル化を問うための見取図を準備していると言えるのではないだろうか。ソジャの空間論／都市論が結節するのはまさしくこの点にあると思われるのである。

〔付記〕なお本稿は、文部科学省科学研究費補助金〔基礎研究(B)(1)〕「地理空間のジェンダー分析—フェミニスト的視角をめぐって—」(研究代表者 吉田容子, 研究課題番号 12480016) ならびに文部科学省科学研究費補助金〔基礎研究(B)(1)〕「ポストモダンの景観論・空間論における「文化的転回」の影響とその評価に関する研究」(研究代表者 山野正彦, 研究課題番号 14380028) を使用した研究成果の一部である。

注

1. 本稿は『ポストモダン地理学』の翻訳出版を機に、エドワード・ソジャ教授を招聘、来日(2003年8月)が決まったことを受けて、筆者が準備しその時どきに発表してきた文章を再構成したものである。第13回目大阪市大 COE の B 班研究会議は、E・ソジャと加藤の講演として2003年8月11日の18時から20時まで、大阪市阿倍野区あべのメディックス7階 研修室Cで行なわれた。加藤政洋(流通科学大学)「『ポストモダン地理学』および空間論の受容に関する紹介」、E・ソジャ(UCLA)「『ポストモダン地理学』再訪」の順であった。本稿は、そのときの発表で準備した資料と発表内容(I), 『ポストモダン地理学』の「訳者あとがき」(II), 『人文地理』(第55巻第3号, 2003年)の特設レポート(III), 『第三空間』から第9章を『10+1』に訳出した際にまとめたレポート(IV)に概ねもとづいている。
2. 上野俊哉「空間の政治学」『10+1』第4号, 1995年。
3. 水内俊雄・大城直樹・多木浩二・吉見俊哉「新しい地理学」をめぐって『10+1』第11号, 1997年, 64-84頁。
4. 日本地理学会「空間と社会」研究グループ編『社会—空間研究の地平——人文地理学のネオ古典を読む——』大阪市立大学文学部地理学教室, 1996年。
5. 田中 純・岩崎 稔「メディア都市の地政学」をめぐって『10+1』第13号, 1998年, 62-77頁。
6. 上野俊哉「空間論的転回, その後」『現代思想』第27巻第13号, 1999年。
7. 松本博之「学史・方法論(学界展望)」『人文地理』第52巻第3号, 2000年。
8. ソジャの主要な著作は以下のとおり。1) *Postmodern Geographies* (Sage, 1989) [E・ソジャ著(加藤政洋ほか訳)『ポストモダン地理学』青土社, 2003年], 2) *Thirdspace: Journeys to Los Angeles and Other Real-And-Imagined Places* (Blackwell, 1996), 3) *Postmetropolis* (Blackwell, 2000)。②を部分的に訳したものとして以下のものがある。2-1) 'The Stimulus of a Little Confusion: A Contemporary Comparison of Amsterdam and Los Angeles', in *Thirdspace*, pp. 280-320. [E・ソジャ著(加藤政洋訳)「ちょっとした戸惑いを刺激として——アムステルダムとロサンゼルス同時代の比較——」『10+1』第24号, 2001年, 146-155頁, 『10+1』第25号, 2001年, 151-168頁]。
9. 来阪時の講演会(2003年8月11日)で、ソジャは1972年にロサンゼルスへ移ったことが転機になったと語っている。このことはわたしたちに、歴史学者のカルロ・ギンズブルクがロサンゼルスに身を移したことをきっかけにして「距離」を省察したこと、あるいは地理学者のデレク・グレゴリーがバンクーバーに移ったことで *The geographical Imagination* を破棄し5年近くの歳月をかけて *Geographical Imaginations* を書き上げたエピソードを想起させもする。
10. Soja, E. (1980): *The Socio-spatial Dialectic. Annals of the Association of American Geographers* 70, pp. 207-25. [E・ソジャ(水内俊雄訳)「社会—空間弁証法」(前掲, 日本地理学会「空間と社会」研究グループ編『社会—空間研究の地平』), 46-64頁]
11. Soja, E. *Thirdspace: Expanding the Scope of the Geographical Imagination*. In D. Massey, J. Allen, and P. Sarre eds, *Human Geography Today*, 1999, pp. 260-278.
12. Soja, E. In *Different Spaces: the Cultural Turn in Urban and Regional Political Economy. European Planning Studies* 7-1, 1999, pp. 305-318.
13. Dear, M ed. *From Chicago to L.A.: Making*

- Sense of Urban Theory*, Sage, 2001.
14. 町村敬志『越境者たちのロスアンジェルス』平凡社, 1999年。
  15. マイク・デイヴィス『要塞都市 LA』青土社, 2001年。
  16. Davis, M. Homeowners and homeboys, *ENclitic*, Summer 1989.
  17. アラン・スコット『メトロポリス』古今書院, 1996年。
  18. Gottlieb, R. and FitzSimmons, M. *Thirst for growth*, University of Arizona Press, 1991.
  19. Dear, M. and Wolch, J. *Landscapes of despair*, Polity Press, 1987.
  20. Scott, A. and Soja, E. eds. *The City*, University of California Press, 1996. 他に, Dear, M. et al. *Rethinking Los Angeles*, Sage, 1996.
  21. 長尾謙吉「都市再編とロサンゼルス学派」『季刊経済研究』第25巻第1号, 2002年, 177-188頁。
  22. Miller, D. The new urban studies, *The Chronicle of higher education*, August 18, 2000.
  23. Scott, A. *Technopolis*, University of California Press, 1993.
  24. Storper, M. and Scott, A. *Pathways to Industrialization and Regional Development*, Routledge, 1992.
  25. Fulton, W. *The reluctant metropolis*, Solano, 1997.
  26. Dear, M. *The Postmodern Urban Condition*, Blackwell, 2000.
  27. Ethington, P. Waiting for the “L.A. school”. *Southern California Quarterly*, 80-3, 1998.
  28. ライクマン「時間=外」『Anytime』NTT 出版, 2001年。
  29. Ethington and Meeker. Saber y conocer. In *From Chicago to L.A.*
  30. Soja, E. Heterotopologies: a remembrance of other spaces in the Citadel-LA. In Watson, S. and Gibson, K. eds., *Postmodern Cities and Spaces*, Basil Blackwell, 1995.
  31. この点で、セントラム全域をめぐる巡検にソジャを連れ出した人物がいた、というエピソードは興味ぶかい。ソジャは彼を「セントラムのボードレール」、「都市のインナー空間の地理学者—遊歩者」と評している。「ボードレール／遊歩者」と「地理学者」の互換性は、何を意味するのであろうか。ベンヤミンは遊歩者について、次のように述べたことがある。「一方では、この男は、誰からも注目されていると感じていて、まさにいかがわしさそのもの。他方では、まったく人目に触れない、隠れこもった存在」。
  32. ルフェーブルは、晩期に「リズム分析」を構想するなかで、「窓からの眺め」と題された短い論文をものしていた。とはいえ、ソジャが道向こうの住人の生活行動を順繰りに描写するさまは、ある意味で窺視者のそれ voyeuristic であることは否めない。
  33. だが、「スパイストラートにて」と「スパイストラートを離れて」がうまく噛み合っているとはいえ、特に後者は国土空間の自己完結的なシステム(それ自体の発見は興味ぶかいのだが)を静態的に記述するにとどまっている。それは「ロサンゼルスを分解する」にも言えることで、グレゴリーは都市景観の形態学であると批判した。
  34. この第9章は最終章ということもあり、奇妙な構成になっている。アムステルダムとロサンゼルスの比較に関する本文に、後記一として「上からの眺め、そして下からの眺めについて」、そして後記二として「ポストメトロポリスの予察」が加えられているのである。この後記一は、都市記述をめぐる論争へのソジャの回答、後記二は『第三空間』のきわめて詩的な結語であると同時に当初は同書の姉妹書として構想された『ポストメトロポリス』への緒言ともなっている。
  35. 加藤政洋「ポストモダン人文地理学とモダニズム的「都市へのまなざし」——ハーヴェイとソジャの批判的検討を通して——」『人文地理』第51巻第2号, 1999年, 48-66頁。
  36. 町村敬志・西澤晃彦『都市の社会学』有斐閣, 2000年。
  37. 吉原直樹編『都市の思想』青木書店, 1993年。
  38. 斉藤日出治『空間批判と対抗社会』現代企画室, 2003年。
  39. ①吉原直樹『都市空間の社会理論』東大出版会, 1994年。②吉見俊哉「グローバル化と脱—配置される空間」『思想』第933号, 2002年。

## Edward Soja in Postmodern Geographical Turn: Some Reflections on Soja's Spatial / Urban Theory

Masahiro KATO

American geographer Edward Soja's *Postmodern Geographies* stimulated the upturn of interdisciplinary spatial theory. *Postmodern Geographies* was published in 1989, and it gave rise to a trend which was called "Spatial turn" or the "Renaissance of spatial theory". This is because the importance of space came to be recognized within such various academic arenas as cultural studies, urban sociology, feminist thought and urban studies. In this essay, I consider the process of spatial turn that was originated by *Postmodern Geographies* and how it was accepted and received in Japan. I also offer some reflections on the concept of urbanity in Soja's series of works: *Postmodern Geographies*, *Thirdspace* and *Postmetropolis*. In addition, the originality of urban geography proposed by Soja, especially on Los Angeles and Amsterdam, is suggested through an analysis of the street geographical discourse that is written of in chapter 9 of *Thirdspace*.

Keywords : Edward Soja, *Postmodern Geographies*, spatial turn, Los Angeles, urban geography